

春の江戸絵画まつり ほとけの国の美術

府中市美術館 24. 03. 09～05. 06



「ほとけの美術という言葉から、どんな美術を思い浮かべるだろうか？ 天平時代の優美な仏像、平安時代の洗練された仏画、鎌倉時代に「運慶」が作った端正で力強い仏像だろうか？ もちろん、何れも素晴らしい「仏教美術」である。しかし、本展覧会で紹介する「ほとけの国の美術」は少々違う内容である。江戸時代の画家「伊藤若冲」が描いた独特な白象画も、「丸山応挙」や「長澤蘆雪」の無邪気で可愛い子犬も、仏教がなければ生まれなかった美術である。



土佐行広（京都市・二尊院蔵）《二十五菩薩来迎図》
縦長の画面中央に「阿弥陀如来」が、二十五の菩薩と地蔵・竜樹がそれを囲み、下部の先頭には「観音・勢至・薬王・薬上・普賢の五菩薩」が描かれている。」このような構図は室町時代に多いとされている。

本展では、画家たちの制作の根底にあった「仏教」をキーワードにして、現代人の心を魅了する様々な作品を見渡している。展示品は、江戸時代の絵画が主であるが、昨年修理を終えたばかりの室町時代の仏画大作を展覧できる。他に近世以前の仏教美術の優品も展示され、来迎図から「若冲」、「応挙」や「蘆雪」の子犬まで「ほとけの国」で生まれた美しくアイデアに溢れた作品を楽しむことができる内容である。



伊藤若冲 《石峯寺図（せきほうじず）》
1789年 一幅 絹本墨画

境内を中国の「西湖」に見立てたような幻想的な景観が面白く、背後の赤門先の山中に石仏群が散在し、獅子や象に乗る渡水羅漢に、門前にはユーモラスな顔つきの仁王、左中ほどには釈迦の説法と、全てが愉快地略描されている作品である。